
雨の中の君と僕

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の中の君と僕

【コード】

N0930X

【作者名】

空

【あらすじ】

痛さと言葉で思い出す君の事

再会の投げ！（前書き）

再会、ここから始まるストーリー

再会の投げ！

あの日は小雨だった。玄関から一歩出て、見上げた空は曇ってた。傘を使うか使わないかを悩むような雨だった。でも僕はいつも折りたたみ傘を鞆に仕舞ってるのを思い出し、その日は普通の傘を持たず学校に向かった。

道や木そして家屋その全てが濡れていて、なにかいつもと違う風景に見えた。それが何だか僕には楽しくて、色々見ながら学校へと進んだ。

学校は家からそんなに遠くなくて、歩いて20分ぐらいで、家を出たのが7時41分ホームルームが8時半だから、間に合う。そう確信していた。

いつも通りの行動、でもちょっと風景の違うことにウキウキしてる僕という違いはあったけど。

そのまま色々見て学校に向かっていて、その途中に神社がある事を思い出した。その神社はもう何年もあって、でも神主がない無人の神社で、その神社は無人として有名で子供の遊び場と化してるくらいなんだ。

僕はその神社が濡れた姿を見たくて123段ある階段を登った。

「えっ……」

今思えば、僕がどれほど間抜けな声と顔であったか今でも恥ずかし

い…

僕が神社に続く階段を登りきり鳥居むこう、お賽銭箱の近くに彼女がいた。

「やっと来た！あゆむ！」

元気に僕の名前を呼ぶ彼女、腰まで届きそうな黒い髪で少しつり目、何処その大和撫子？だって言いたい、てか

「誰？」

素である時は聞いてしまい、彼女は目を見開き僕目掛けて走り出し、鳥居付近に僕を…投げた！

どさつと音がし、背中が痛い…でも痛いのは、すごくではなくて少し、何故だろうと困惑する頭で考えてると仰向けで倒れている僕を見下ろす彼女が居た…

「あゆむ…思い出した？それとも、もう一回いっとく？」

もう一回いっとく…その言葉を聞いた瞬間、寒気と悪寒と悪夢を思い出した…

あれは僕が小2のときで転校してきた子がいた。その子は頭も良くて運動も出来た。でも顔は覚えてない、だって子供のときだから仕方ないよね。あの時の僕は遠くから彼女を見てるだけで、話しかけたことなんか一度もなかった。だって輝いていてみんなも彼女と

話してたから今さら話してもね〜って感じで、話さなかった。今思えば、凄すぎて嫉妬とかみんなみたいに一緒の行動をしたくないって思ってたと思う。うんで小3になったある日、この神社でその時も雨が降ってたかな…覚えてない、まっまいいか、でその時も此処の神社で僕は友達の幹くんと薫くんと遊んでただけど、幹くんと薫くんは門限でいつも4時までしか遊ばなくて帰っちゃうんだけど。その日は僕は帰らず神社の屋根のあるところでゆっくりしてたんだ。小雨で少し濡れたのを乾かすためだったはず。でもその時は奥からがさこそって音がしてあの時は恐怖よりも好奇心が勝って、奥に僕はゆっくり向かったんだけど、そこにいたのは女の子で、ああ女の子ってわかったのは、スカート履いてたからだよ、で女の子に話しかけようとして声と手を同時にかけたら、まずは悲鳴をそして、僕は空中を舞い背中を強打して意識を落としたんだ。

「そっそっすうだ！小3のときに僕を投げた！」

「そっそっすうそれよ！で私の名前わ！？」

彼女はコクコクと頷くけど、僕は僕は！

「わからない！」

その瞬間また僕は空中を舞い、どさつと音がした。背中を強打したけど、あまり痛みは無い、でも仰向けだったのがまた仰向けになっただけで、状況は変わらず、僕はこの状況を早く脱出するべく頭をフル回転させて続きを思い出すことにした。

そっそっすうだあの時は投げられたあと、体を揺らせて起こされたんだ…それで僕が起きたときに彼女は僕を見下し、じゃなくて、見下ろしてた。心配そっすうに…

でもさ…今僕を見下ろしてる彼女は心配？何それ美味しいの？って
感じで気にしてないよ？

「思い出した？」

「最初だけ…」

少し、彼女は考える素振りを見せた。僕は仰向けながら身構えるが
間抜けでしかないなと心の中で涙を流した。

「まあ、今はいいわ」

彼女は自己完結させて身構える僕の手首を掴むと一気に引き、僕を
起こしてくれた。

僕は立ち上がったあと、制服の汚れを払いたかったがダメだった。
雨のせいで、濡れた制服の汚れは落ちなかった。

「あ〜うん、ごめん。それじゃあ学校に行けない…」

彼女は、自分のしたことが悪かったと思ったのか謝ってきた。まあ、
別に良いんだけどと思いつながら僕は笑ながら

「大丈夫だよ〜別に、学校なんて一日行かなくてもへーき」

「そっそう？良かった〜でも制服綺麗にしなきゃね…」

安堵の息を漏らした。彼女は僕の手首を掴むやいなや歩き出した。

「ちょっとどこ行くの!?!」

「家?」

「いえ? いえええー!?!」

そんな叫び声を出した。そして僕は何処からか、ドナドナの歌が聞こえた気がした…

そして、この日の再会で僕の、いや僕達の物語が始まったんだ…

再会の投げ！（後書き）

難しいよー

あれえ〜？

僕は…何処に連れていかれるのかドキドキしてた…まあ、着いた場所

「なんで？僕んち？」

「えっ？だつて服洗わないと」

「いやいや！それは、普通の事なだけどさ！でも、あれでしょ！？」

なにが言いたいのか纏まらず、口だけが空回りして自分でも意味不明だった。

そんな僕を無視して彼女は…

「お邪魔しまーす」

置いてった。

「いらつしゃい！ななちゃん」

普通に迎えられる、なな…あ、そうだ。ななちゃんだ…

「ねえ、あゆむ？今「オカアサンフクガー」まあ、いいわ…」

怖い…オンナの坎はヤバイ…

「あらあら、まあまあ」

と言いながらお母さんは、玄関から上がったところでバスタオルを渡してくれた。

「それにしてもななちゃん大きくなって、それに綺麗になったわね」

「いえ、それほどでもないです」

少し顔を赤らめながら、ななちゃんは応えた。僕は着替えるために自分の部屋に入りながらそんな、ななちゃんにドキッとした。こっちに視線を向けようとする前に急いで入った。

「僕も思う…」

鼓動がひどい…昔の事を思い出した。

ななちゃんに投げられ心配されて、でも僕は許した、だっていきなりだし、子供だし、それよりも、ななちゃんに見惚れてた…だから、許した…あの時が初恋だったんだって今思えばそう分かる…

「昔は可愛いかったでも今は綺麗になってる…投げらるけど…」

まだ鼓動がひどい？

「さっさと着替えなさいよ！あゆむ！」

ドアの音でしたー

「分かったから、そんなに叩かないでえー！」

すこし涙目声（怖くて）です。でも、昔もこんな感じだった…

「で、ななちゃんはあゆむを投げたの？」

僕が着替え終えて、リビングで帰って来た経緯を話す事にした。ほかしながらだけど…

「はい、すいません」

「良いのよ、悪いのはあゆむ、だってななちゃんの事、忘れてたでしょ？」

お母さんの言葉にビクってしちゃったよ…だってその事は話してなかったから。ななちゃんは、驚いた様子で

「どうして分かったんですか？」

「あゆむの母ですから！」

「そうですか」

あれ、ななちゃんなんで納得顔なの？いいのそれで？

「あゆむ、それで良いのよ」

ドツキイイ！心を読まれた！？

「それよりも、ななちゃん？あゆむを貰ってくれるの？」

「¥@&…:3:9&…/&…&…@

僕から変な言葉が出た。

「まだ、無理ですよおばさま」

「「あははは」

なんだろ…コワイヨ

「言い間違いよ、言い間違い…でねななちゃん、本当に久しぶりね。」

お母さんは、ななちゃんに笑顔で言った。

「はい、お久しぶりです。」

ななちゃんは、僕と話す時は、口が悪いのに、お母さんや他の人だと丁寧になるんだ…今も変わってないのかな？…まあでもずるい、てか僕の足踏んでるよ？ななちゃん…

「あゆむ、実はね…」

なんかお母さんが真剣な顔になった…

「一ヶ月前から私、知ってたんだ！こっちに戻ってくるって！」

「…ウソーン…」

愕然です…驚愕です…てか、展開がおかしいです…

「良いリアクションね」

「一ヶ月ってお母さん…」

「早く教えてよー！」

「だめえー」

「なんで!?!」

「面白そうだから?」

「…」

「ななちゃんがニヤニヤしてる。お母さんもだけど。あ、また足を踏まれた…」

それから、いろんな話を話した。今までなにしてたのかとか、両親は元気かとか、学校何処かとか、まあ一緒の高校だったけどね、でいろんな話を聞いて、でも一つだけ話してくれなかった。

「ねえ、ななちゃん!こっちに引っ越して来た理由は?」

僕は、気軽に聞いてしまった。

「…理由なんかないわ…」

俯き加減でボソツと応えるななちゃんに戸惑い、お母さんに助けを
求めるように視線を向けるも、笑ってるだけだった。

「えーと、えーと…」

狼狽える僕にななちゃんは

「あゆむに会いたくて来たのよ」

絶対嘘だろって言いたくなる意地悪な笑顔で言っ
て来たななちゃん…真相はいつかななちゃんの口から聞くことにした。だから、僕は

「ありがとう！僕も…会いたかった！」

忘れてたけどね！…って足がぁー！

真っ赤になってるななちゃん…可愛い。昔と雰囲気は、変わったけど、昔と同じように、生活できたら良いなってこの時は、そう思ってた…

あれえ〜？（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

自己満足な小説で、妄想小説ですが、また読んでください。

痛いです。(前書き)

あゆむの部屋の窓から奴が来る…

痛いです。

あれからななちゃんは、1時ぐらいまで居て、帰った。まだ荷物の開封してなかったんだって。

ななちゃんが帰ったあと、お母さんが

「ねえ、あゆむ…ななちゃん、綺麗になったわね」

「…うん」

「…顔…赤いわよ！」

「…うん」

「ふふっ！このこの！」

そうしてお母さんに弄られた。でも、この後すぐにお母さんは真面目そうに聞いてきた。

「あゆむ…覚えてるの？ななちゃんのこと…」

「…最初の所は思い出した…でも…」

「良いのよ今わ。でも、ななちゃんのこと全部思い出してあげてね。男のでしょ！」

「…うん！」

そういつとお母さんは、笑顔で

「あゆむ、お昼食べる？」

「あ、うん食べるー」

side 七海

私は、^{かすら}鬘 ^{ななみ}七海

今日、本当に！久しぶりにあゆむに会ったの！でもあゆむの奴「誰？」って普通に言ってきたの！まあでも…昔は可愛い男の子で、今では…可愛い男になってたから、ドキッてしたけどさ…サラサラの髪で目がクリツとして、チワワか！？って言いたい。いやいや！でもそれ以上に忘れてるのはひどい！まあ神社に現れるなんて思ってみなかつたから、緊張してて、実は私、声が震えてた…ばれてないって信じたいよお…まっまあ、その後あゆむの家行っただけど変わって無かつた…ちよつと、いや、すごく嬉しかった…おばさまも変わってなかつたし、でもあゆむの奴なんか変だつたな…

side 歩

お母さんとお昼を食べて、晩御飯も食べ終わって、今は自分の部屋でゴロゴロして携帯でお見舞いメールに返信してた。

返信が終わったとき、窓からドンドンと音がして小心者の僕はまたビクツとしてしまった。

「なっなに!?!」

窓を恐々と見ると

ガラガラと窓を普通に開けて入って来ます…侵入者です…寝ます…

「寝ないの!」

叩かれた。

「痛いよ!」

「うるさい! 仮病!」

「仮病じゃない!」

「じゃあなんで休んだの!?!」

「えーと、背負い投げで投げられて?」

「なわけあるか!?!?!」

「本当だって!」

「どの口がいうか、このこの!」

「いひゃいです!」

口を思いっきり引っ張られました…痛いです…

今現在進行形で僕の口を引っぱているお人は桜井 香ポーイッシさくらい かあじ
ユな女の子で特徴？は165の身長と栗色の髪、それで一つ年下で
同じ高校の一年生（実は僕は二年生）でお隣でベランダからいつも
来るんだよねー」

「ねー！って誰に説明をしてんのよー！」

「口に出てた？」

「ばっちりー！」

「おやすみ」

「寝るな！」

ガスガス殴られる…

「本当に用なの？」

いつも通りの喧嘩、全てが変わった。このときの僕には予想もでき
ないことが…

痛いです。(後書き)

読んでくださりありがとうございます！

小説って書いてるときは楽しいのに

読み返すとちょーはずいです) # ^ . ^ # (

まだまだ続くのでよろしくお願いします) . | . () ム

胃が…

「見舞いよ！見舞い！嬉がれこのやる！」

「ウレシイデス」

「心を込める！」

痛いです…

「まあいいわ、あゆむ全然元気だしね、私部屋に戻るわ。」

「わかったー。あっそうだ。ななちゃんこの街に帰ってきたってさー」

そう言った僕をかおりは力一杯肩をつかんできた。

「あのっ！本当っ痛い！」

僕のライフはもう0だよ？（物理的に）

「ななみ…覚悟しなさい！」

そう捨て台詞にを言い窓から出てゆくのだった。

「あゆむ！」

で帰って来たよお…

「なに!?!」

「おやすみ!」

「おやすみー!」

嵐のように来て去って行ったかおり、本当に嵐です。

では、満身創痍なので、おやすみなさい

キンコーンカーンコーンそう僕を起こす。

「いつまで寝てんだ!」

「叩かないでよ正明」

まさあきじゃなくて、まさとし正敏 あきひろ明博略してまさあき

ルックスは普通? いや上の下かな (かおりが言ってた) 特徴は女顔? どのかの役者何だっけ知らないけどね、あとばか? かな

「なあ、歩…」

「なに?」

「歩ではない感じの説明しなかったか?」

「ソナナコトナイヨ」

「…そうだよな！歩だもんな！」

「ウン！」

「…まあいいや、本題なんが、午後の授業の始まりに転校生が来るってよ！」

「ふーん」

「おいおい、しらけてんなーまあその気持ちわかるぜ！だって男子のイケメンやろう、らしいからな〜はあー！」

「なるほど！だから女子が少ないんだ！」

「いやそれは関係ない、今がお昼休みだからだ」

「あ、そうなんだ…なら、ご飯食べようか？」

「だな！」

男子の転校生か…友達になれたらいいな！

「なあー歩？」

「…なに？」

「美形だよな？」

「…うん」

「でもさ…男じゃなくて、女がおねい様って言う女の人じゃん！」

「…あー？えーと??」

「だから、ちょー美人さんがこのクラスにいきたあああああああああ
あああー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

うおー……………

クラスが揺れてるよ…てか女子も叫んでるおねい様って、なにこれ
怖い…

「…ほん」

あつ、彼女が喋りだしたら止まった。

「私は鬘 七海です。今日からこのクラスの二員になるので、よろ
しく願います。」

うおー……………!!!!!!

また揺れる。

酔いそ…

「先生私は一番後ろ右から二番目が良いのですが？」

「ええ、いいわよ。」

「正明バカどきなさい」

正明が違う席に移った…バイバイ正明…

目で問う、なに？って

「お隣ですね…よろしくお願いします。」

爛々とした目で見ないで…胃が痛い皆の視線が僕に刺さるよ…

あっ右隣にも挨拶した…視線が刺さらなくなった。ふう

何事も無いよーに…

「あの、先生まだ教科書が無いので、お隣に見せて貰ってもよろしいでしょうか？」

「う、うむ、いいぞ」

「ありがとうございます。歩くん見せて下さい。」

「えっ！…」

皆が睨んでくるよー！ってななちゃん！ニヤニヤしないで！僅かでもわかるからね！

「良いよ…」

席をくっ付けないで！

「ありがとございます……（ボソッ）ありがと、あゆむ」

「（ボソッ）どういたしまして」

…胃が痛い…

「歩さー、鬘様に恨まれることでもしたか？初対面だろ？」

「正明…いや、バカ」

「うわ！歩らしからぬ毒舌」

「胃が痛い…」

「仕方ない」

「…帰る」

「ああ…達者でな」

「…うん」

胃が痛いです…これからどっなるんだろ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0930x/>

雨の中の君と僕

2011年10月31日02時17分発行